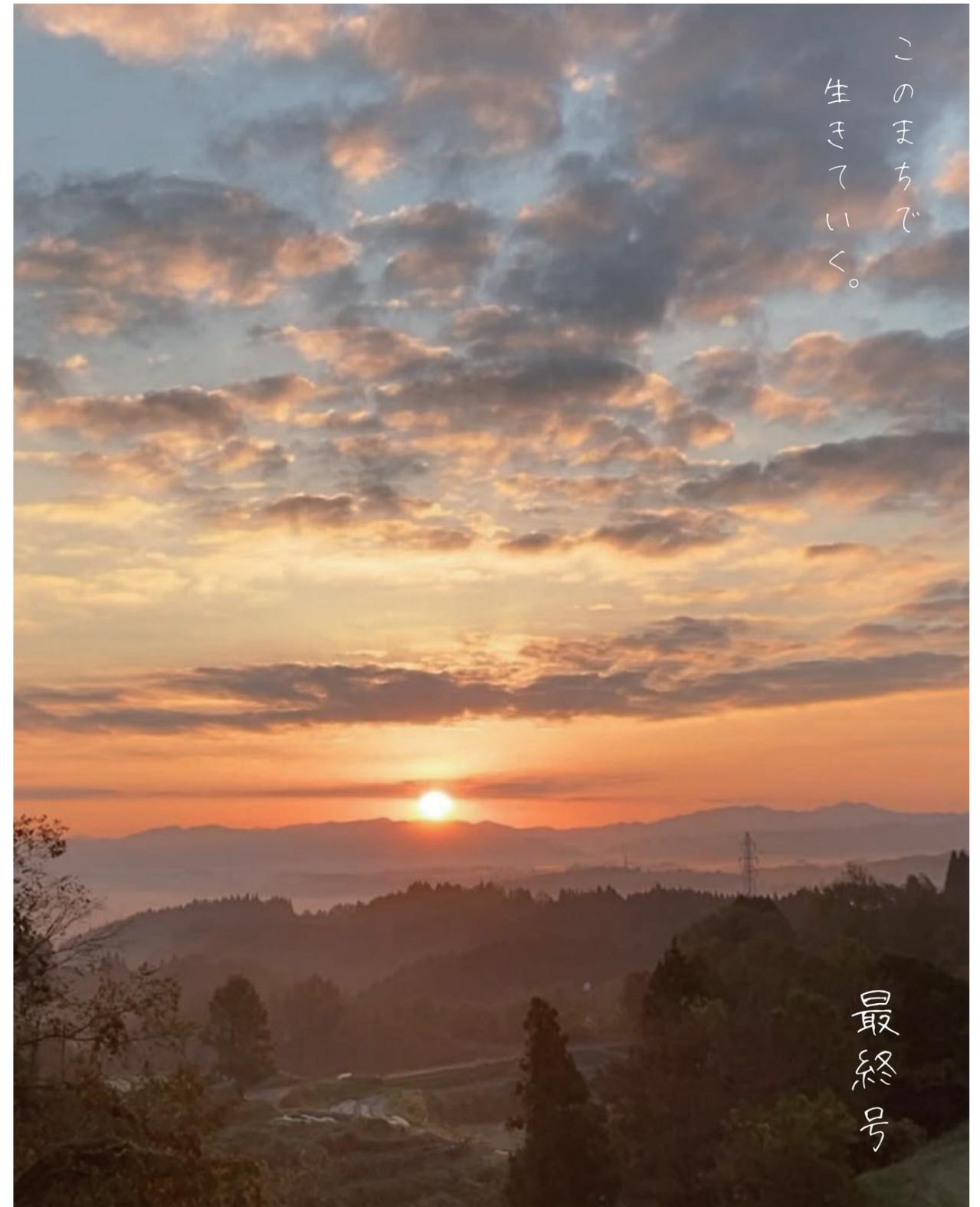


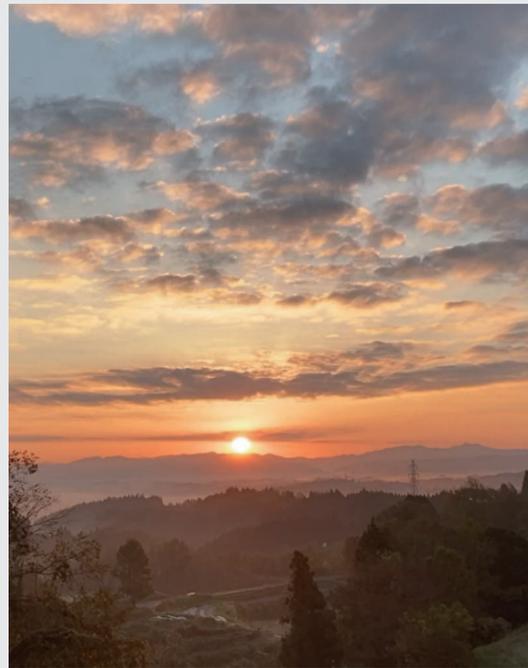
ぶんご HOME

このまちで
生きていく。



最終号

今後について



家から眺める朝焼けの景色（表紙写真）

豊後大野市に定住し、
朝焼けの美しく見える里山の民家で
週末限定の民泊をします。

地域おこし協力隊卒業後、週末限定の小さな民泊をする予定です。これまで1年半ほどかけて、夜間と休みの日に毎日、空き家だった民家を夫と共に改修してきました。地域の方々や友人たち、いつもお世話になっている方々に心温かなサポートをたくさんいただき、心から感謝の気持ちでいっぱいです。少しずつ再生している家の日々の様子は、Instagramのみで発信しています（下記QRコードより）。移住し、地域おこし協力隊の活動を通じて大好きになった豊後大野市での暮らしがこれからも楽しみです。そして、これからは自分たちが移住希望者の方々の手助けになるよう精一杯励みます。



最後に...



地域おこし協力隊のみんなと

これからも、よろしく願いいたします。

知り合いのいない地への移住。最初は車の運転もできず、慣れないことも多く不安でいっぱいでした。しかし、地域おこし協力隊の活動を通じて豊後大野市の豊かな自然と温かい人々の心に触れ、今まで自分の苦手だった「文章を書く」という機会など、少しずつ不得意が好きに変わり、次第にこの地でずっと暮らしたいと思うようになりました。すべては、受け入れて支えてくださった地域の皆様、市の職員の皆様、友人や家族のおかげであります。市内には現在、各フィールドで励む地域おこし協力隊が4名（ロッジきよかわ1名、ゲストハウスLAMP 豊後大野2名、商工観光課スポーツツーリズム1名）います。ぜひ、今後とも地域おこし協力隊へのご指導と応援をいただけますと幸いです。

好奇心旺盛な姉妹2人で狩猟の道へ

「性格は反対なんだけれど、2人ともおしゃべりと食べる
ことが大好きなのよ。」
そう顔を見合わせては大笑いする仲良し姉妹の姿に、こ
ちらも思わず面白い笑いでしまう。
田北たず子さん(69)、東藤さき代さん(65)は、豊後大野
市大野町の実家敷地内に獣肉処理施設「女猟師の加工所」
を設け、狩猟から解体、加工までを行っている。2011
年9月に、わな猟の免許を取得して以来、年間120頭以
上の害獣を解体処理してきた。

きっかけは自宅周辺に自生していたタケノコだった。姉妹
そろって医療関係の仕事に勤めていたが、ゆっくりと山の
恵みを楽しむ暮らしをしようと、共に早期退職。まずはタ
ケノコを収穫・販売しようとしていた矢先、一番美味しい
収穫時期にイノシシが食べ尽くしてしまう状況を目の当た
りにし、農を生業にしている地域の人たちの、動物による
被害の大変さを実感したという。
*1 狩猟とは、絶滅の危険性のない鳥獣を対象として、一定制
限の中で捕獲することで、鳥獣被害の対策と自然生態系の
保全を図るものだ。野生鳥獣による農林水産被害額は全国
で約158億円にのぼるともいわれ、狩猟者に寄せられる
期待は年々高まっている。
田北さん、東藤さん姉妹は、そんな狩猟の免許取得を地域
の人から勧められ、持ち前の好奇心で狩猟の道へ足を踏み
入れることとなった。

師匠の存在が狩猟の後押しに

狩猟免許を取得してから1か月後、はじめて自分たちの仕
掛けた「くくりわな(塩ビ管やワイヤーロープなどで作っ
た輪によって、獣の足をくくり捕えるわな)」に40キロ程
のイノシシが掛かっていることを確認した。
「わなにかかっているイノシシを見て、2人ともどうしよ
うと慌てちゃって、何もできないでいました。」
そんな時に駆けつけてくれたのは、今では2人が「師匠」



1 師匠の菅田さんは家族のような存在
2 加工所で商品化したイノシシ肉とシカ肉
3 女猟師の解体した肉はくさみがない



と呼んで慕う菅田均(かんだひとし)さん(82)だった。
菅田さんは手際よくイノシシを捕獲し、姉妹に解体の方法
まで丁寧に教えてくれた。

「師匠は、どんな動物がかかっても駆けつけて私たちにた
くさんのノウハウを優しく教えてくれました。師匠がいな
かったら今の私たちは無いと思っています。」
菅田さんの方も、目を細めてゆっくりと柔らかい声で姉妹
について話す。

「2人とも習得が早くてね、とても優秀。放血(血を抜く
処理作業)も上手だし、教えることはもう無いですよ。地
域みんなが認める名猟師になりましたね。」

お互いに信頼し認め合う姿はまさに家族のよう。菅田さん
の存在が、2人の猟師生活を大きく後押ししてくれた。

狩猟は感謝して命をいただく行為

姉の田北さんは検査技師、妹の東藤さんは看護師として医
療関係に長年従事していたことから、姉妹の命の重みに対
する想いは狩猟仲間内でも人一倍強い。2人が何よりも大
切にしていることは、捕獲したイノシシやシカを、感謝の
気持ちを持ってしっかりと食すことだという。

「狩猟は里山の景観や私たちの生活を守る一方で、一生懸
命に生きた大切な命を奪うことでもあります。感謝の気持
ちを忘れず、仕留めた後は、できる限り余すことなく美味
しく食べることが大事だと思っています。」
*3 環境省の統計によると、イノシシとニホンジカのみで年間
およそ124万頭以上が全国で捕獲されているが、その6
〜7割は、捕獲後にそのまま廃棄されている現状がある
こと。姉妹はそんな現状に対し、命を無駄にはしてい
ない、と強い想いを形にすべく行動してきた。

2014年に加工所を新設すると、素早く解体処理した新
鮮な肉をパック詰めにして道の駅あさじで販売開始。イ
ノシシ肉は、農産物肉加工所「そら」と提携し、イノシシの
紅茶煮である「紅茶いのしし」として商品化に繋がった。
また、自身の加工所でも「猪肉の塩こうじ焼」「鹿肉のガ
リック焼」「猪・鹿のまごころ煮」などの総菜や、料理に
そのまま使える「ゆで鹿」などを作り、販売。ふるさと納
税の返礼品としても大人気ということだが、同時に鹿肉と
猪肉を使ったレシビの開発とチラシづくりにも励み、ジビ
エ料理の魅力を発信している。

「自然の中、ドングリや栗など旬のものはかり食べて育つ
動物たちは、とても栄養価が高くて健康にも良いんです。
私たちがジビエの素晴らしさを発信することが、狩猟して
捕らえた動物に対する供養だと思っています。」
自然と共に生きる私たち人間が大切にしていること。それ
は命をいただくことへの感謝の気持ち。田北さん、東藤さ
ん姉妹は、これからも狩猟を通して里山の景観と田畑を守
りつつ、命をいただくことの有難さをたくさんの人へ伝え
続ける。

動物を狩り、解体し、食す。
その一連の流れを通じて、
見えてくる世界がある。
笑顔の絶えない姉妹猟師が
教えてくれたのは、
自然と共に生きる私たちが
忘れてはいけないものだった。



“命をいただく” 狩猟を、
このまちで。

女猟師
田北 たず子 さん / 東藤 さき代 さん

自分のルーツを巡る旅

「自分は何者か」。

誰もが一度は考えたことのある疑問かもしれない。それは2つの国籍の間に立つ人々にとってはより強い疑問となる場合がある。

清らかな川の流れが魅力的な『ロッジきよかわ』は豊後大野市清川町にある宿泊施設。そのスタッフとして働いている深田アレックス誠さん（以下、アレックスさん）（26）は、2017年5月に豊後大野市へやってきた。

カナダ人の父、日本人の母のハーフとしてカナダで生まれ育ったアレックスさんは、小さい頃から欧米と日本の両者の文化と価値観の中で育ってきた。

「家の中ではどちらかというと日本の要素が多かった気がします。玄関では靴を脱いで家にあがるし、母の作る料理は半分の割合で日本食でした。」教育熱心な母のもとで日本語の勉強をしたり、毎年夏には日本の小学校で1か月の研修を受けたりと、家族の愛情の中、日本の文化や教育にも触れながらカナダで育っていった。

カナダでは「アジア人」として見られ、日本では「欧米人」として見られたというアレックスさんは「カナダ人であり日本人である」という、2つのコミュニティの境界線上で生きてきた。

「日本人の母の厳しいしつけや教育も、カナダ人の父のリラックスした感覚と教育も、どちらも理解できたり感謝してました。また、住んでいたバンクーバーにはアジア系も欧米系のコミュニティもあったので、周りにも十分受け入れられていたと思います。ただ、当時は2つの価値観の



中で、自分の軸が分からなくなること時々あったんです」。

そんなアレックスさんは、20歳になると海外を旅して回ろうと決める。それは持ち前の好奇心から広い世界を見てみたいという気持ちと、自分探しをしたいという想いがそこにあったからだ。そして2017年5月、最初の旅先として選んだのは日本だった。

「まずは日本に2年間滞在して、日本の心だったり自分のルーツというものを探ってみたいと思っていました。それから世界の各地を旅していこうと考えていました。」そして大阪からスタートした日本旅の4日目、別府市での滞在時に豊後大野市にも立ち寄った。

「清川町のロッジきよかわに訪れたら、あまりの川の綺麗さと景観の美しさに心を奪われました。そのあと日本の各地を巡ったのですが、ロッジきよかわの事が忘れられなくて。やっぱりここで働きたいと思ったんです」。

アレックスさんの直感が人生の転機を生んだ瞬間だった。

最高のパートナーや仲間たちとの出会い

ロッジきよかわを運営する『JOYVILLE AGE株式会社』の代表取締役社長、江副雄貴（えぞゆうき）さん（34）は、アレックスさんがロッジきよかわで働きはじめた当時のことを振り返る。

「アレックスがロッジきよかわに来てくれたのは、ちょうど事業が行き詰まっていた時だったんです。僕1人でこの施設を運営しなければならなくて悩んでいた時に、スタッフとして入って来て、一緒にここを作りあげていくことで、本当に助けられました。仕事でもプライベートでもたくさんの時間を共にしてきて、家族のような存在です」。

「色々ハプニングもあったけれど」とアレックスさんと顔を見合わせては、2人で笑い合う姿は本当の兄弟のよう。

一方、アレックスさんも江副さんについて「パートナーであり家族」と強調する。

「喧嘩もするけれど、言いたいことをしっかりと言い合える関係で、良いパートナーです。奥さんも仲良くしてくれ

て、このまちで暮らす僕を夫婦で支えてくれています」。

ロッジきよかわでは、地域の人の雇用や留学生のインターンの受け入れを積極的に行っており、多様性のあふれる環境とメンバーで運営している。インターン生が最終日を迎えると、みな涙で別れを惜しむことも。

「ここで働いた人は『何か』をつかんでいくんです。美しい川と景色と、受け入れてくれる存在がここにはあって、僕もここで自分は『オンリーワン』なんだと思えるようになりました」。

旅のはじまりの地だった日本に滞在しはじめて、気づけば4年。アレックスさんは、家族のように信頼関係を築き合える存在や大切な仲間との関わりを通じて、少しずつ自分を見つけていることができるようになった。自分は自分であり、唯一無二。このまちで確かな自分に出会い、自分探しの旅はいったんストップした。

そんなアレックスさんは今後の夢についてこう話す。「自分の能力を最大限に使って何かをつくってみたいですね。自分だからこそできることを見つけたいですね」。

アレックスさんは未来を見つめながら、このまちで自分らしく生きている。



スタッフのメンバーと共に。(右から2番目 江副雄貴さん)



オンリーワンの自分に 出会うまち。

ロッジきよかわ
深田アレックス誠さん

自分のルーツを知りたい。
そんな探求心から、
海を越えて日本へと渡った。
旅の最中に行き着いた
このまちで出会ったのは、
最高の仲間たちと、
オンリーワンの自分だった。

3年間ありがとうございました！

豊後大野市地域おこし協力隊を卒業します。

改めて自己紹介します。

日浅紗矢香（ひあささやか）と申します。
平成5年生まれ、福岡県久留米市出身です。
大学卒業後、家具インテリア用品小売業に就職し、配属先の宮崎市で2年間過ごしました。
その後、今の夫と出会い、将来は自然豊かな地で小さな宿をしたいという夢を持ち、ご縁のあった豊後大野市へ移住しました。そして、まずはまちや人々のことをしっかりと知りたいと地域おこし協力隊に応募しました。



2018年10月〜2021年9月までの3年間、豊後大野市の地域おこし協力隊として活動してきました。地域おこし協力隊とは、過疎や高齢化の進む地域において、地域外の人材を受け入れ、地域協力活動によりその地域への定住・定着を図る総務省による制度です。私はこの地域おこし協力隊の制度で「移住定住促進」をミッションとして、様々な活動をしてきました。当フリーペーパーをはじめ、移住定住促進に関する活動をしていく中で、本当に多くの方々とお会いしたくさんのお話を聞き、このまちの素晴らしさや人の温もりを感じる事ができました。3年前までは全く知り合いのいなかったこの豊後大野市が、今では大切な自分の居場所だと感じています。当フリーペーパー最終号で、これまでの活動報告と、心からの感謝の気持ちを伝えさせていただきます。3年間、豊後大野市の地域おこし協力隊として、また市民の一人として受け入れてくださり本当にありがとうございました。

イベント

No.01 移住フェア

県内で実施された移住フェアや、自治体のPRイベントに参加し、豊後大野市の魅力を発信しました。



No.02 ジモグル

令和元年度、令和2年度にそれぞれ大分県内の地域おこし協力隊による地域PRイベントに参加しました。1年目は椎茸のPR、2年目は運営側として参加しました。



No.03 チューリップフェスタ

ライブペイントアーティストをお招きして「絵の具で遊ぼう」という絵の具遊びイベントをまちのみなさんと共に実施しました。



No.04 ふるさとまつり

三重町の大原総合体育館周辺特設会場にて開催された「豊後大野市ふるさとまつり」の記録係をしました。



No.05 移住者交流会

移住者たちが悩みを共有したり情報交換をする移住者交流会を実施しました。



No.06 フォーラムなど

地域団体などが主催するパネルディスカッションやセミナーに参加し発表などをさせていただきました。



情報発信

No.01 お試し滞在モニター

お試し滞在モニターとして東京都から1週間、豊後大野市に滞在した2組のコーディネートをしました。



No.02 PR 動画出演

「テッパン!おおいた」のYouTube 広告動画に出演しました。



No.03 手作りフリーペーパー

『ぶんごHOME』作成



No.04 YouTuber ヘプタゴン

豊後大野市のゆるキャラヘプタゴンをYouTubeでPRしました。



No.05 SNS 情報発信

Instagram『ぶんごおおの暮らし』で、豊後大野市の魅力や、移住生活を発信しました。



取材

移住に関する情報を掲載しているサイト「豊後大野市移住定住ポータルサイト」。空き家バンクに関する情報のほかにも、豊後大野市の「ひと」を紹介しました。



No.01 移住者への取材

「豊後大野市移住定住ポータルサイト」で、移住者の皆さんを紹介しました。



No.02 地域で頑張るみなさんへの取材

「豊後大野市移住定住ポータルサイト」で、地域で頑張るみなさんを紹介しました。

